

犯罪被害者遺族のサポート・グループにおける有用な支援と留意点の検討 —支援者へのインタビュー調査から—

研究代表者

公益社団法人みやぎ被害者支援センター 佐々木健太

I まえがき

1. 犯罪被害者遺族の現状

犯罪被害者遺族（以下、遺族）の支援の本質は中長期である。犯罪によって大切な家族を突然暴力的に奪われた痛切な悲しみや苦しみが短期間で癒されるはずがないからである。他方、遺族の支援における初期ないし短期の支援も重要であり、その重要性を否定するものではない。大山（2016）が指摘するようにこれまで犯罪被害者支援の分野では初期かつ短期の介入を中心とする支援の報告が多く、中長期的な支援の報告は少ない。犯罪被害者の中でも遺族に限定すればさらに少ない。この現状と遺族の支援の本質を踏まえると、遺族の中長期的な支援の検討に比重を移すべきではないだろうか。このような問題意識から、本研究では遺族の中長期的な支援において一助となる知見を明らかにすることを目指す。

現在の我が国の遺族について整理すると、令和2年の殺人などの一般刑法犯罪による死亡者数は687人であり、業務上過失致死や危険運転致死などの交通事故による死亡者数は2,839人であった（法務省、2022）。ともに減少傾向ではあるが、犯罪被害による死亡者数は決して少ないとは言えない。またその遺族は数万人に上り、それは毎年積み上がるため、その総数は少なくとも数十万人に及ぶ。中島ら（2009）によると、犯罪被害による死別は通常の死別に比べ強い精神的衝撃をもたらすため、治療が必要な心的外傷後ストレス障害（PTSD）や複雑性悲嘆の有病率が高いとされる。そのような遺族に対して現在の我が国における心理的支援は十分ではなく、遺族に対する質の高い心理的支援方法を示すのは臨床心理学における喫緊の課題の一つである。

2. 犯罪被害者遺族支援特有の難しさ

また、遺族支援特有の難しさとして以下の2点が挙げられる。1点目は、支援者が立ち去りやすいという点である。長井（1999）は、家族、隣人、職場など社会一般の人々や医師など専門家の人びとの間で「わずらわしいことには手を出したくない」「被害者への対応はとても微妙なので、かかわるのはなるべく避けたい」という先入観ないし偏見が根強くあり、そのために被害者が敬遠され、その結果、被害者はますます孤立感を深め、また傷ついていくとしている。宮地（2007）は「当事者はその問題から逃げられない」。が支援者は「関わろうという熱意をもちつづけなければ、そこ

にとどめられないし、熱が冷めればいつでも去っていくことができる」とし、「近寄っていかうとする人のみが問いただされるのだから、離れておいた方が正解だ」と支援者がいなくなってしまうかもしれない、としている。すなわち、被害者遺族の支援者は、困難さといつでも立ち去れるという構造ゆえに、その場から立ち去りやすいと思われる。

2点目は被害者遺族に対する偏見が根強く存在するという点である。被害者遺族は、まわりの人からステレオタイプ、あるいは偏見を伴うレッテルが貼られ、そのレッテルに見合った行動をするように期待される傾向があり、被害者は、その役割期待から暗黙の圧力を感じてしまい、その期待に添うような行動様式を知らず知らずのうちにみつけてしまうとされる（酒井ら、2004）。その偏見により、「周囲からの2次被害の問題」（白井、2008）も生じる。

3. 犯罪被害者遺族支援において重要な視点

これまでに示されている犯罪被害者遺族に対して、支援の目指すものについて整理する。支援の目指すものは以下の3点が特に重要であると思われる。1点目は『「意味の探求プロセス」に寄り添っていく』（酒井ら、2004）ことである。富永（2004）は、被害者支援の心理的支援のねらいは「悲惨な出来事を忘れ去ることではなく、その出来事を自分の人生の文脈に納めていき、この出来事から学んだことを、自分の人生にも、そして社会にも生かしていくことである」とし、長井（1999）は、「精神的な回復には、つらい体験によって失ったという現実を認め、失ったものを悼み、それを巡ってくり返し湧き起る強烈で複雑な感情に向き合い、気持ちを整理し、つらい体験に新たな意味付けする作業が欠かせない」としている。2点目は「主体性や自己決定能力の回復」すなわち、「自分には自分で判断し、自分で意思決定する能力があるのだという感覚を取り戻すこと」（長井、1999）である。長井（1999）は、遺族が「主観的に経験しているのは圧倒的な無力感と孤立無援感」とし、その支援は「自助能力の取り戻しと、孤立無援感の改善がその中心的課題になる」としている。3点目は「自分にとってたいせつな人々との間につながりがあるという感覚を取り戻すこと」（長井、1999）、すなわち「社会とのつながり」である。『心のケア』とは、被害者と支援者との間に生まれる人間的な信頼関係によって、被害者が事件で失った人や社会への信頼を回復できるように支えること」（酒井ら、2004）とされる。

II 目的

これまでの研究では、遺族の心理的支援において、心理教育、グリーフ・カウンセリングやグループによる支援などが有用とされる（白井、2008）。本研究では遺族の中長期的な支援という視点からグループによる支援に焦点を当てる。小西・白井（2007）は、遺族のグループについて「グループに参加している遺族は、その後の精神的苦痛の程度がやわらぐ効果がある」とその意義を示しているが、一方で遺族に対するグループによる支援の効果的なあり方や留意点についての論考はあまり進んでいない。そのような遺族に対するグループによる支援の効果的なあり方や留意点を考える上で、グループに参加する遺族や運営する支援者の実態や体験を明らかにする必要がある。グループに参加する遺族の体験についての研究はいくつか見られるが（例えば藤崎・西山、2006；佐々木、2021）、グループを運営する支援者の体験に関する研究は

とても少ない。大崎（2008）は、グループを運営する支援者について論考を示しており貴重な先行研究ではあるが、総論的でありインタビューなどの手法により支援者の体験を十分に把握しているとは言い難い。そのため、本研究では遺族のグループを運営する支援者の体験に着目する。支援者の体験については特に、遺族のグループを運営する上でどのような困難を抱え、それに対してどのような工夫や対応をしているのか、また運営していくうえでの留意していることを明らかにしたい。そうすることにより支援者が遺族のグループを立ち上げる際や運営しているグループを継続していく上で参考になる知見を示すのが本研究の目指すところである。

また冒頭に挙げた問題意識から、遺族のグループを運営する支援者の体験の中長期的なプロセスを明らかにするために、立ち上げから現在に至る中長期的な期間について、時期ごとに区切って詳細に検討する。

また遺族のグループによる支援のうち、本研究では全国各地で多くの実践がなされているサポート・グループ（以下、SG）を取り上げる。現在、「セルフヘルプ・グループとSGの境界はあいまいである」（大河内ら、2018）とされるが、本稿ではSGについて、「専門家あるいは当事者以外の人びとによって開設・維持される、参加者の自主性・自発性が重視される相互援助グループ」（高松、2009）という定義を用い、同趣旨のグループをSGと呼ぶこととする。我が国の遺族のSGは増えており全国で多くの実践がなされている。その主たるものとして各県の民間被害者支援団体が運営するSGがあり、現在38のSGが確認できた（公益社団法人全国被害者支援ネットワーク、2022）。本研究ではそのような民間被害者支援団体が運営するSGに焦点を当てて検討する。その理由は、「民間被害者支援団体の意義の一つに切れ目のない支援がある」（岡本、2011）とされ、民間被害者支援団体は支援者が代わりながら長期継続的に被害者を支援できるという特徴を有した数少ない支援機関であるからである。

また海外における遺族のSGに関連する研究は非常に少なく、それについても Spooren et al. (2001) のように SG の参加遺族を対象にその心情を研究したものが見られる程度である。Spooren et al.(2001)の研究では、遺族は5年以上が経過した後でも外傷的な悲嘆と強い精神的苦痛を示し続け、長期的なサポートを提供する必要があることが明らかにされている。遺族のSGの支援者に焦点を絞った海外の研究は現時点では見られない。

以上のように遺族のSGの実践は多くなされているが、国内外においてSGを運営する支援者の体験、特に支援者が抱える困難やそれに対する工夫、留意点について時期ごとに区切って検討したものは見られない。これらを踏まえ本研究は、時期を区切りながら、SGを運営する支援者の困難と工夫を中心に有用な支援について考察し、さらに運営上の留意点について検討を加えることを目的とする。

Ⅲ 方法

1. 対象者と手続き

調査対象者は、SGを運営してきた民間被害者支援団体の支援者13名とした（表1）。5つの異なるSGが対象であり、支援者とは研修を1,800時間受けた後に各民間被害者支援団体から

「犯罪被害相談員」と認定された者を指す。調査期間は2021年7月～10月であり、地方部の5県の民間被害者支援団体と、その支援員からの紹介を通して、筆者から個別に調査を依頼した。調査方法は一人当たり約120分～180分の半構造化面接で、各県の支援センターや公共の会議室など対象者が安心して話せる場所で実施した。新型コロナウイルス感染症の影響で一部の対面でのインタビューが困難になり、一部は電話またはテレビ電話を用いてインタビューを行った。対象者の許可を得て録音しながら面接を行い、その後逐語記録を作成した。録音の許可が得られなかった1名は速記により記録した。

表1 対象者のプロフィール

対象者	性別	年代	職業	SG運営における役割	支援経 験年数	SGにおける 支援年数	SGの立ち上げ からの年数	SGの構成
A	女性	80	元支援者	コーディネーター、	17年	12年	17年	罪種問わず
B	女性	70	支援者	企画, Fac, 書記	18年	17年	17年	罪種問わず
C	女性	60	支援者	Fac, 書記	21年	12年	17年	罪種問わず
D	女性	40	公務員・支援	Fac, リーダー（運営	14年	10年	10年	罪種問わず
E	女性	60	支援者	Fac, 書記	14年	10年	10年	罪種問わず
F	女性	70	元支援者	Fac	18年	16年	17年	罪種問わず
G	女性	50	支援者	Fac	11年	11年	14年	交通事故
H	女性	40	支援者	運営支援	4年	2年	13年	罪種問わず
I	女性	60	支援者	Fac, 書記	18年	9年	13年	罪種問わず
J	女性	50	支援者	運営支援	3年	3年	13年	罪種問わず
K	女性	60	支援者	Fac, 書記	15年	14年	14年	交通事故
L	女性	70	支援者	Fac, 運営	15年	12年	14年	交通事故
M	女性	70	支援者	Fac	7年	3年	14年	交通事故

2. 面接内容

SGの立ち上げから現在に至るまでの時期について、高松（2021）を参考に、SGの立ち上げの時期を「立ち上げ期」、立ち上げ期以降数年後を「展開期」、展開期後からインタビュー1年前までを「安定期」、インタビュー1年前からインタビュー時点までを「現在」の四つの時期に分類した。インタビューはインタビューガイドを基に、各時期において、遺族のSGの運営をしていて困難だと感じたこと、大変だったこと、ファシリテーター（以下、Fac）として困難だと感じたこと、困難に対してどのように対応したか、工夫したこと、留意したことなどを尋ねた。

語る流れに沿って適宜質問を投げかけ、語りには自由度を持たせた。

3. 倫理的配慮

本調査は、筆者が所属する組織の所属長および東北大学大学院の倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認 ID：20-1-065）。対象者に対し、本研究の目的、匿名性と守秘義務、研究への拒否権などについて説明し、書面にて同意を得た。インタビュー後に気持ちが動揺した場合は、被害者支援を長年経験している臨床心理士が対応する旨を伝えた。結果は各対象者に郵送にてフィードバックし、対象者からコメントをもらい適宜修正した。

4. 分析方法

本研究では、インタビューデータに即した分析に適しており、データから概念を抽出し概念間の関連付けを行うことを目指すグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）を採用した。GTAにはいくつものバージョンがあるが、本研究では分析の手続きが明確に示されている岩壁（2010）を参考に分析を行った。まず録音したインタビューデータを逐語化し、それを時間軸に沿って情報を整理し、全体像を把握した。次に各時期においてリサーチクエスチョンに関わる語りの部分を選択し、意味の単位で区切り、概念を構成するコードをつけた。その後類似するコードをグループにまとめ下位カテゴリーを生成した。さらにデータの比較検討を重ね、それらをより抽象度が高く包括的な中位カテゴリー、上位カテゴリーへと集約をした。また、各カテゴリーを関係づけていくなかでモデル図を生成した。コードやカテゴリーがデータを反映しているかを確認し、分析者の主観により分析内容が恣意的に操作されるのを防ぐため、GTAによる研究経験が豊富な臨床心理士3名による検討を受け、修正を行った。

IV 結果

分析の結果、36の中位カテゴリー、13の上位カテゴリーが生成された。カテゴリーの一覧を表2に、モデル図を図1に示した。【 】は上位カテゴリー、《 》は中位カテゴリー、〈 〉は下位カテゴリーを示す。以下、時期を区切り各上位カテゴリーの説明をする。なお各時期の中央値は「立ち上げ期」が3年、「展開期」が7年、「安定期」が5年、「現在」が1年であった。

表2 生成されたカテゴリー

時期	上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
立ち上げ期	軌道に乗せ運営・進行する難しさ	SGを軌道に乗せ運営する難しさ	参加遺族を集める難しさ／SGをやめた遺族へのケア不足	最初に来た4人の(遺族)の中で1人が「自助グループに参加できません」と辞退された。今思えば、気持ちのケアなどすべきだった。(I)
		SGについての知識不足	SGについての知識不足／自助グループそのものについて、あまり知識なかった。	
		Facとして進行上の難しさ	進行の難しさ／参加遺族の意見の相違／話をする人・しない人のバランス／	(E)／Facの仕方が大変だった。どういう風に話を振っていけばいいか。私自身Facすることが精一杯なので。(K)／遺族の方々の意見の相違がある。それをどうこう

時期	上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
			参加遺族の被害罪種の違 い	やっていくのか、Fac の部分。(D)／交通事故と殺人の 遺族を一緒にしたのが難しかった。(A)
		立ち上げのため の準備	研修を受ける／ロールプ レイを行う／遺族との打 ち合わせ／他県の SG と の交流	全国ネットワークの Fac の研修会に参加したり。(F)／ (ロールプレイで)遺族役をやってみて、遺族の感情の 変化を体験していった。(I)／「こういう趣旨で自助グル ープを作っていきたい」と遺族へ伝えて、遺族にお会 いしながら進めていった。(I)／全国ネットワークで他県 の自助グループの人と交流した。(B)
SG に参加しやすく 準備や工夫	遺族が SG に参 加しやすくする 工夫	参加遺族の被害罪種によ る制限／通しやすい場所 選び／心地よい空間作り ／ゲストスピーカーを呼 び知識を得る／他の遺族 の講演を聞いてもらう／ アンケートを取る		今は犯罪被害者ということで罪種を限定していないが、 当初は交通遺族のみ。(E)／参加してくださる方の負 担をなるべく少なくということで、通しやすいところにし た。(E)／辛い話をするので和ませる花とかお菓子を用 意した。仏壇に上げられるように袋も用意した。心地よ い空間を作るようにした。(F)／立ち上げ時期は非常に 考えてゲストスピーカーとして弁護士や臨床心理士や マスコミ呼んだりした。(K)
	参加遺族への積 極的関り	参加遺族宅への家庭訪問 ／被害者の命日に手紙を 書く		事務的支援するのではなく、家庭訪問をまめにした。 それによって繋がりが強くなった。(B)／スタッフが被害者 の命日にハガキを書いた。細かい気遣いをした。
	支援者間の取り 組み	支援者間の事後の振り返 り／支援者間の事前打ち 合わせ／経験者に話を聞 く		事後カンファもしている。みんなで「こういうコメントでよ かったかな」とかまめにやっていた。(D)／毎回、(SG の)事前に話をする。気をつけないといけないこと、(参 加遺族の)体調も悪くなるかもしれない。(E)
参加遺族を守るた めの配慮・取り組 み	Fac として配慮し たこと	参加遺族間への介入／話 の振り方・区切り方／参 加遺族へ話しかけるタイ ミング／参加遺族の表情 に目を配る／コメントを 短くする		ご遺族の中で他の方の被害を知りたいという関心持た れた時に、どこまで止めるか。空気を悪くしないように言 葉をストップかけるか気をつけた。(I)／話題の振り方 も、すぐしゃべる人と言葉少ない人、どのように言葉 がけするか気を遣った。今吐こうとしている言葉が誰か を傷つけないように。すぐしゃべる人に対してはどこで 区切ったらいいのか気を遣った。(F)／Fac として参加 者の表情に目を配るように。(K)
	支援者としての 立場の自覚	個人的な関わりはしない ／支援者として立場をわ きまえる／個人の意向を		個人的な関わりはしない。(B)／何ができて何ができない か、判断を自助グループのスタッフはしていけないとい けない。(A)／誰かの好みが強くなるように。私のこ

時期	上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
			出し過ぎない配慮	れがよくて、あの人のあれはいいの？となるので。個人の意向、好みが出ないように。(D)
		二次被害を防ぐ 取り組み	参加遺族についての事前の十分な理解／参加遺族に対する言葉の遣い方／余計なことは言わない／SG 直後の参加遺族への声掛け／振り返り後の参加遺族への声掛け	ケースをよく理解すること。事件の内容とともに、家族構成、家族の事件についての考え方、宗教観の違い、など多くの情報を知っておく。(A)／グループ終わってから、全員でないが、遺族に声をかけた。本が好きの人には「面白い本ありました？」や、映画の話をしたり。SG の中とは違う。切り替えができるような一言二言かけるように。(D)／会が終わった後、振り返りをする。「今日 N さん、しんどそうでしたよね」となれば、その方に電話したり個別にお話したり。(I)
		新しい参加遺族へのサポート	事前面接による参加希望者と SG のマッチング／新しい参加遺族への SG 後の心情確認	事前面接をして、参加を希望した人が今の自助グループに参加して大丈夫かを把握した。その方の悲嘆の状況や程度を把握した。(E)／新しく参加した人について、グループ終わってから 5 分から 10 分フォローするようにした。今日どうだったか。(E)
	参加遺族からの不満・要望	参加遺族からの不満 参加遺族からの要望	参加遺族の被害罪種混合の違和感 楽しいことをしたい／自由に気持ちを話したい／新たな被害者に連絡を取りたい／講演をしたい	参加遺族に「違和感がある」と言われた。そう言われたのは、罪種の混合だからだと思う。(A) 「ある歌手(事故遺族)の音楽かけたい」とか「食事行きたい」とか「お出かけしたい」とか。(SG を)離れて、楽しいことしたいという要望出る時期あった。(D)／被害に遭った方にいち早く連絡取って、何かしたいなと思われる遺族の方もいた。(I)
展開期		SG を継続して運営する難しさ	参加遺族の固定化／参加遺族の減少	毎回全員に例会の案内をしているが、参加者は同じ人が目立ち、固定された感じがする。(A)／展開期の最後あたり、遺族 2、3 人入ったが離れていった。(B)
	継続して運営・進行する難しさ	Fac として進行上の難しさ	参加遺族の故人との続柄や時期の違い／話が長い参加遺族への対応／Fac としての距離感	みんな時期も違ったり。亡くされたのがご主人の場合も、奥さんやお子さんの場合もある。亡くなられた人によっても思いが違うんだというのは大変だった。(L)／Fac の難しさは遺族と慣れ過ぎないこと。遠すぎないことと離れすぎないこと、バランスが難しい。(F)
	SG を充実させるための準備や工夫	参加遺族の要望への対応	要望を断る／要望を叶える	(食事などは)今なら行けると思うが。当時は慣れない部分あり断りました。(D)／フォーラムの時の自助グループのスペースの展示の要望など、応えられるものは

時期	上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
				受けつつ、出来ることは受け入れる。(G)
		SGを充実化させる工夫	故人を偲ぶ会の開催／お出かけ SG の実施／ウォーミングアップの導入／SG 参加前の遺族による見学	いつもは被害のことを話す。年に一回は(故人の)思い出を語る集い。(故人と)一緒に暮らしてこうだったよーとか語る。(E)／その頃は新鮮な空気を入れてみようという工夫はあった。お出かけ自助グループみたいなことをした。(I)／会の最初のウォーミングアップ。肩を回す、背伸び、深呼吸。リラックスすること、大事だと思う。(A)／参加予定の遺族に、必ず、グループに入る前に同席して観察してもらった。(A)
		Facとしての工夫	Fac の技法を学ぶ／立場が近い参加遺族に話を振る／平等に話できるように心掛ける	心理士のアドバイスで「言いつばなしでいい」ということを聞いて気持ちを前向きにできた。(C)／参加者が何人かいるとご主人を亡くした方々、奥さんを亡くした方々とか、(同じ続柄の故人を亡くした遺族が)何人かいたものですから、そちらの方へ話を振った。(L)
		支援者間の取り組み	支援者間の事後の振り返り／Fac 不足にならないよう準備	振り返りでその時の思っていること、まずかったことを話すのがすごくよかった。先輩 Fac の O さんや心理士の P さんが言ってくれること、あれはよかったですね。(C)
	枠を作り参加遺族を守る	支援者としての立場の明確化	支援者間で統一の見解を持つ／支援者としての限界を伝える／節度を持つ	個々人が回復するにつけ、センターへの意見要望も高度かつ活発に出されるようになった。センターとしても、それらに対する統一した見解を持っていることが大切。(A)／出来ることと出来ないことをきちんと説明し伝えることが大切だと思う。(A)
		二次被害を防ぐ取り組み	参加遺族の健康状態を見る／参加遺族への言葉のかけ方の配慮	遺族の健康状態、みんな見ていた。健康、体力面とメンタル面の両方の。(A)／やっぱり、声のかけ方、言葉をかけるということすごく大変でした。(C)
安定期	長期間運営・進行する難しさ	SGを持続して運営する難しさ	日程の調整／参加遺族が少ない／参加遺族が遠方のため参加が大変	仕事をしている方が多いので、みんなに来てもらうために工夫というか、日にちを話し合いで決めるとか。そういうところは大変だったかなーと思う。(C)
		Facとして進行上の難しさ	参加遺族間の衝突	警察や検察、裁判などに対して苦情を聞いてもらいたい人と、日々の生活や家族のことの悲しみや苦しみを聞いてもらいたい人との衝突があった。(M)
	ニーズに応えるための準備や工夫	参加遺族のニーズに応える柔軟な運営	ランチ会の実施／訪問型 SG の実施／ゲストスピーカーを呼び知識を得る	一度ランチ会というのをやった。普段来れない人参加された。弁当を取って、食べながら話をする。ふだんよーりざっくばらんに。(H)／遠方や高齢で参加できない遺

時期	上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
				族に会いに行き、観光する。訪問されたご遺族は喜ばれて。(H)／ゲストスピーカーとして、新聞記者をお招きした。遺族が沢山話をされていた。(J)
		Facとしての工夫	制度を勉強する／参加遺族の資料や記録を読む／話を区切る介入を行う／話し手のポイントへ話を振る／参加遺族の共通点への焦点化	援助制度色々変化しているので、一生懸命に勉強しながら調べたり。(C)／自助グループに関する資料を読んだり。立ち上げからの記録を読ませてもらったりしてご遺族の気持ちの変化を知れた。(J)／進行上の工夫としては、一人一人ずつと話聞いてきていつも話されるポイントが一人一人だいたいある。話途切れた時にそういうところに話を振る。(M)／(参加遺族の衝突があった時に)「共通するのは、遺族は大切な人を亡くされたこと」というのを申し上げて収まった。大切な人を亡くした悲しみは一緒だから。(M)
		支援者間の取り組み	SG スタッフ以外の支援者の同席／支援者間の事後の振り返り	いつも終わってから反省会を開いて、参加者の話の内容や前回からの変化、困っていることなどスタッフが感じたことを話し合って検討し、次回の参考にした。(M)
		参加遺族が安心して居られるよう留意したこと	言葉遣いに気をつける／話しやすい雰囲気作り／参加遺族の話をよく聴く	会の終了時にスタッフが一言話す機会の時に、参加者の思いに傷つけないよう言葉遣いに気をつけて話をした。(L)／話しやすい雰囲気にしようとお茶やコーヒー出したり、頷いたり。(L)／なるべく支援者側は話をしないように。とにかく聴く。(M)
	参加遺族が安心して居られるための配慮	二次被害を防ぐ取り組み	緊張感を忘れない／環境面の配慮／参加遺族への言葉がけの配慮／参加遺族の真意をはかる	担当者の中で、緊張感を忘れない。(H)／アジサイを見ると事件のことを思い出すと聞いたりすると控えたり、お花選びも心にとめて少なめにしたり。(J)／ご遺族の言葉の真意が、素直に乗っかるのも危険。冗談めかして、たとえ明るく冗談めかしく言っても同調するのは違うかなと。(J)
現在	現在直面している運営と進行の難しさ	参加遺族のニーズに応じて運営する難しさ	日程の調整／参加遺族のニーズにできていない／参加遺族の情報を開示する程度	被害当初の話と何十年の悩み、違う。被害者の悩みは変わっていきますので。被害者のニーズにできていない、ということかなと思っていて。(K)／ある遺族が、もともと参加している遺族と家が近所。その方は近所に(事故のことを)知らせていない。生活エリアが一緒なので、今でも悩み中。(H)

時期	上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	語りの例
		Facとして進行上の難しさ	参加遺族の故人との続柄の違い	同じ交通事故被害者とはいえ、父親、子ども、兄弟、ちよつとずつ違うから、ちよつとでも話できた、話聞けたと思ってもらえるのは難しいと思う。(G)
		参加遺族を確保する難しさ	支援した遺族がSGに繋がらない／広報不足による参加遺族の減少／マンネリ化による参加遺族の減少	支援しながら、自助グループに繋がっていかないのが難しいところ。(H)／参加する人達きていただけない、広報も足りないのかなーと。(L)／最近参加者がゼロになっている。マンネリ化しているのが最近の課題。(K)
		コロナ禍による難しさ	コロナの影響で参加できない／部屋に入りきれない	コロナでなかなか参加できない。(D)／コロナ過なので、増えてくると部屋に入りきれないとか、感じるころあります。(H)
		遺族が参加を継続しやすくする工夫	開催場所の工夫／手記集の発行／参加遺族へお便りを出す	Q市でしているが、遠くて難しいという人もいる。そのため、年に1回はR市で行っている。(E)／今年は手記集を発行する予定。気持ちを書いていただく機会。普段の会話の中だけでないもの出てきますし。(H)／担当が季節ごとにお便り出してくれている。(H)
現在の苦境を乗り越える工夫		コロナ禍における工夫	電話で参加遺族の近況を聞く／コロナ感染対策	コロナで会自体ができないので、電話で個別に話を聞く。「どんなですか？」と聞いて、話す人は話す。(G)／アクリルのパーテーション、消毒液、お菓子は個装のもので、換気をして、時間通りに終わる。(H)
		支援者間の取り組み	支援者間の事後の振り返り	グループ終わった後にもカンファをして、「今日はどうだったかね」という時間がとてもいい。自分の振り返りになりし、自分の気持ちの共有ができる。(E)
参加遺族の安心・安全への配慮		参加遺族の居場所となるよう留意していること	よりよい場にしたいという心掛け／参加遺族間の安全への配慮／寄り添う気持ちで話を聴く	メンバー間の安全のはかり方。名前もみんなお話して語られるが、プライベートのときの安心、安全大事にしている。(H)／Facになってから私は一人ひとりに一生懸命聴くようになりました。まず聴くことを重要視していますね。寄り添うな気持ちで聴いています。(M)
		二次被害を防ぐ取り組み	参加遺族の変化を見る／参加遺族への言葉がけの配慮／参加遺族に対するSG後の面接	参加者の変化をなるべく見るようにしている。元気あったが、次の会でこの間と違うのかなとか。(L)／言葉がけは気をつけていますね。(C)／事故の概要を聞くのがきっかけです、という遺族がいた。事後面接があったフォローできた。(H)

注)「語りの例」の文末のアルファベットは語った対象者を示す。

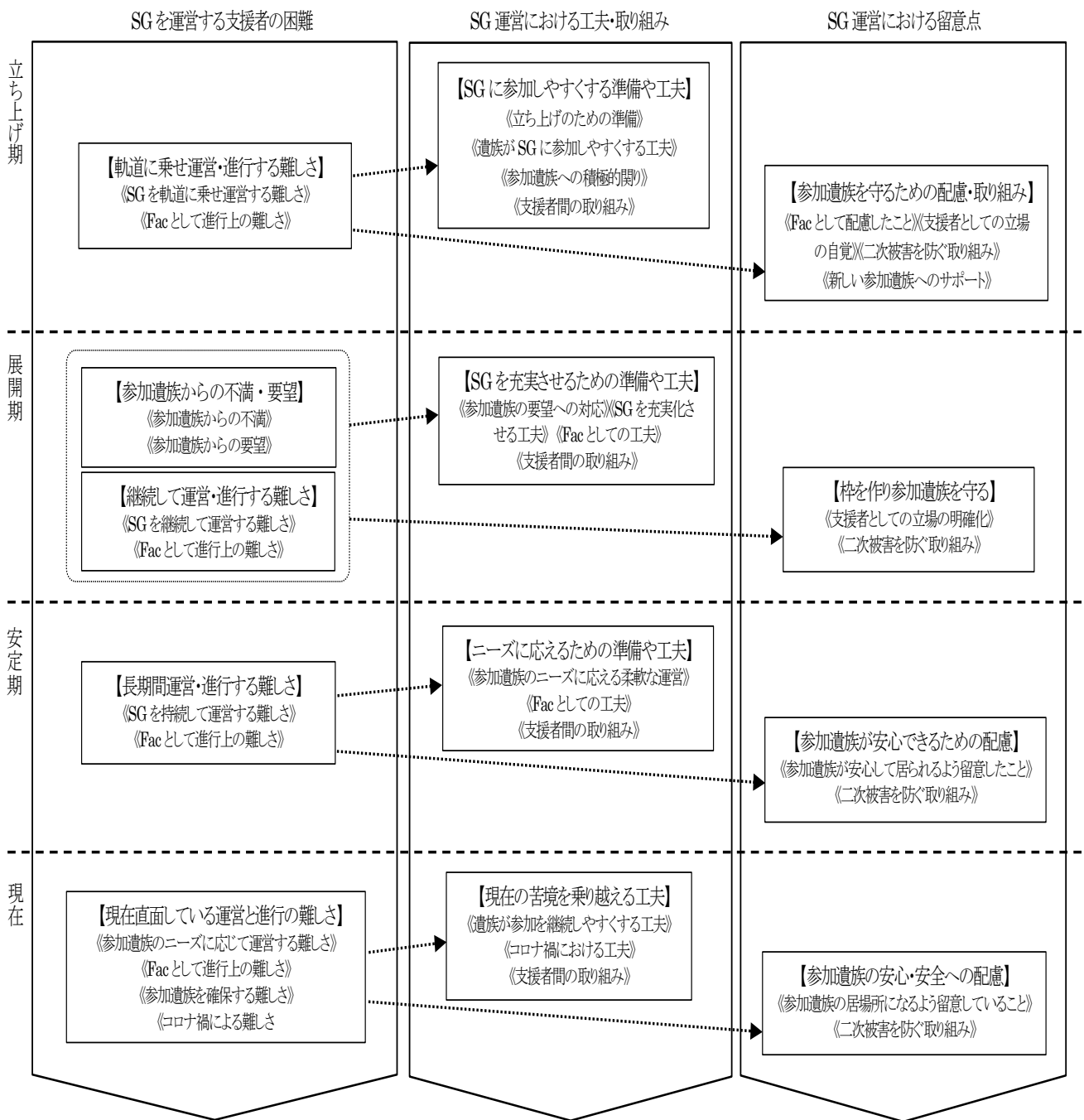


図1 遺族のSGを運営する支援者の困難と工夫および留意点

凡例：【 】…上位カテゴリー 《 》…中位カテゴリー ……→…影響の方向

1. SGを運営する支援者の困難の推移

「立ち上げ期」では**【軌道に乗せ運営・進行する難しさ】**として、《SGを軌道に乗せ運営する難しさ》、《Facとして進行上の難しさ》が示されたが、特に後者は下位カテゴリーが多く見られ、Facとしての困難の多さと複雑さが示された。「展開期」においては、**【参加遺族からの不満・要望】**が見られたが、この時期特有のものであった。これは《参加遺族からの不満》と多様な《参加遺族からの要望》から構成されていた。**【継続して運営・進行する難しさ】**として《SGを継続して運営する難しさ》と《Facとして進行上の難しさ》が示された。「安定期」では**【長**

期間運営・進行する難しさ】として《SGを持続させる難しさ》、《Facとして進行上の難しさ》が示された。「現在」では【現在直面している運営と進行の難しさ】として《遺族のニーズを汲み取り運営する難しさ》、《Facとして進行上の難しさ》、《参加遺族を確保する難しさ》、《コロナ禍による困難》が示され、支援者が現在抱える困難の多様さと深刻さが明らかになった。

以上より、全ての時期において支援者は困難を抱えていることが示された。特に《Facとして進行上の難しさ》は一貫して見られ、その内容は各時期で共通する部分と異なる点があった。また全ての時期において運営する上での難しさも示され、特に立ち上げ期の〈参加遺族を集める難しさ〉に始まり、「展開期」の〈参加遺族の固定化〉、〈参加遺族の減少〉、「安定期」の〈参加遺族が少ない〉、「現在」の〈支援した遺族がSGに繋がらない〉、〈広報不足による参加遺族の減少〉、〈マンネリ化による参加遺族の減少〉という参加遺族を確保する難しさは全ての時期で共通していた。

2. SG運営における工夫・取り組みの推移

「立ち上げ期」では【SGに参加しやすくする準備や工夫】として、多様な《遺族がSGに参加しやすくする工夫》が示され、その一部は困難への対応を示していた。また、《参加遺族への積極的関り》と《支援者間の取り組み》も示された。「展開期」では【SGを充実させるための準備や工夫】として、《参加遺族の要望への対応》、《SGを充実化させる工夫》、《Facとしての工夫》、《支援者間の取り組み》という四つの中位カテゴリにより多様な工夫や取り組みが示された。「安定期」では【ニーズに応えるための準備や工夫】として、《参加遺族のニーズに応える柔軟な運営》、《Facとしての工夫》、《支援者間の取り組み》が示された。《Facとしての工夫》においては、〈話し手のポイントへ話を振る〉や〈参加遺族の共通点への焦点化〉と言った高度なFacの技術も含まれていた。「現在」では【現在の苦境を乗り越える工夫】として、《遺族が参加を継続しやすくする工夫》、《コロナ禍における工夫》、《支援者間の取り組み》が示された。

以上より、全ての時期において《支援者間の取り組み》が見られ、さらにその中でも〈支援者間の事後の振り返り〉は全ての時期に共通していた。また全ての時期において、参加遺族が参加をしやすくするため、ないし参加を継続しやすくするための様々な工夫を行っていた。さらに展開期と安定期では《Facとしての工夫》が見られた。

3. SG運営における留意点の推移

「立ち上げ期」では【参加遺族を守るための配慮・取り組み】として、《Facとして配慮したこと》、《支援者としての立場の自覚》、《二次被害を防ぐ取り組み》、《新しい参加遺族へのサポート》という四つの中位カテゴリによって、支援者が多くの点に留意していることが示された。「展開期」では【枠を作り参加遺族を守る】として、《支援者としての立場の明確化》と《二次被害を防ぐ取り組み》が示された。安定期では【参加遺族が安心できるための配慮】として、《参加遺族が安心していられるよう留意したこと》と《二次被害を防ぐ取り組み》が示された。現在では【参加遺族の安心・安全への配慮】として、《参加遺族の居場所になるよう留意していること》と《二次被害を防ぐ取り組み》が示された。

以上より、全ての時期において《二次被害を防ぐ取り組み》が見られた。また、「立ち上げ期」

と「展開期」では、支援者としての立場に関する留意点が見られた。また「安定期」の《参加遺族が安心していられるよう留意したこと》、「現在」の《参加遺族の居場所になるよう留意していること》は、カテゴリ一名は異なるが、参加遺族の安全感・安心感を確保するために行われた配慮や留意点という点で共通していた。

V 考察

1. SG を運営する支援者の困難

1) Fac として進行上の難しさ

Fac として SG を進行する上での難しさは全ての時期で見られたことから、これは遺族の SG を運営する支援者が抱える大きな困難の一つであることが分かる。詳細に見ていくと、「立ち上げ期」の〈参加遺族の意見の相違〉、〈参加遺族の被害罪種の違い〉、「展開期」の〈参加遺族の故人との続柄や時期の違い〉、「安定期」の〈参加遺族間の衝突〉、「現在」の〈参加遺族の故人との続柄の違い〉のように、参加遺族の考え方や被害罪種、続柄の違いが表面化されたときに進行に困難を感じていた。長井（2004）は犯罪被害者の SG について、達成すべき目的の違い、価値観の違い、物事の進め方に関する感覚の違いなどによって分裂しやすい団体であり、統合するのは容易ではない、としている。考え方の違いによる困難についてはこの先行研究を支持するものだが、被害罪種や続柄の違いによる困難については新たな知見と言える。なお、被害者遺族の続柄の相違について、白井ら（2010）は被害者の親は他と比較して精神健康状態が悪いなどの結果から続柄の違いによる精神健康への影響の相違が生じることを示しており、続柄ごとの心情や精神健康の違いを理解しておくことは重要であろう。

2) 参加者の確保の難しさ

参加遺族を確保することへの困難さも全ての時期で見られ、支援者にとって大きな困難の一つであることが明らかになった。ここには、まず犯罪被害という特殊性が大きく関連していると考えられる。遺族は被害者がある日突然犯罪に遭うまでは日常生活を送っていた一般市民であり、仕事や家庭における役割など現実的な役割を持った存在でもある。その現実的な役割を抱えながら SG に参加すること自体、日程調整をはじめ時間や精神的余裕を作り出さねばならず、決して簡単なことではない。さらに遺族が SG への参加を希望したとしても、その遺族が SG に参加できる精神状態であるか、また SG とのマッチングはどうか、などいくつもの条件が満たされないと新しい遺族が参加することができない。それは既に SG に参加している遺族と新たに参加する遺族の両方の安全・安心を守るためである。すなわち、犯罪被害という特殊性と、SG に参加する遺族を守るために一定の条件が必要になるため、参加者の確保は容易でなくなるのであろう。また、三好（2019）は断酒会というグループを運営する会長が抱える問題の一つとして「会員の減少」を挙げており、他分野のグループにおいても参加者の確保は課題になっている。各グループの特性をよく理解したうえで、支援者側は参加者が継続して参加しやすくする工夫や取り組みが求められると考えられる。

3) コロナ禍による難しさ

「現在」特有の困難として、コロナ禍による難しさも示された。参加できない、または感染対策でソーシャルスペースを保つと遺族全員が従来の会場に入れきらない、といった事態が起きていた。コロナ禍は人類に対して生活面や心身面など多岐に渡り大きな影響を与えているが、SGにとっても影響は大きいと言える。例えば吉川（2021）が報告しているように中断を余儀なくされた SG は少なくない。この事態は現在進行形であり、この困難への工夫や取り組みの蓄積はそれほど多くないため、遺族対象の SG だけでなく、様々な分野における SG の取り組みを参考にする必要があるであろう。

2. SG 運営における工夫・取り組み

1) Fac としての工夫

上述のとおり支援者は Fac としての多くの困難を抱えていたが、一方で「展開期」と「安定期」では Fac としての工夫が見られた。その工夫は大きく二つに分類できる。一つ目は〈Fac の技法を学ぶ〉や〈制度を勉強する〉などの自己研鑽である。村瀬（2004）が指摘するように被害者支援領域は幅広い確かな知識と関連領域の制度についての基本的理解が求められ、さらにそれらは更新されるため、自己研鑽も継続的なものが求められるであろう。二つ目は、〈立場が近い参加遺族に話を振る〉〈話し手のポイントへ話を振る〉〈参加遺族の共通点への焦点化〉などのファシリテーションスキルの活用または応用である。例えば「共通点への焦点化」は、エンカウンターグループのファシリテーションについて安部（2010）が論じた、メンバーをつなぐときにはメンバー間の共通性を取り上げる、という技法と類似している。差異性が強調されると崩壊のリスクがある SG において、共通性に注目し、焦点化する方向性は Fac として柱となる技法の一つであろう。これらの二つの工夫により、Fac として SG を進行する上での困難に対応している部分もあると考えられる。

2) 支援者間の取り組み

〈支援者間の事後の振り返り〉は各時期共通で見られ、支援者を支える重要な取り組みと言える。これまで事後の振り返りについては、福島（2011）が犯罪被害の支援者同士がサポートし合える組織内の雰囲気作りやサポート体制の必要性について言及しているが、具体的にどのような機能があるかまでは明らかにされていない。本研究の語りの例から事後の振り返りで行われている内容を詳しく見ると、「立ち上げ期」では支援者の介入コメントの反省、「展開期」では反省点の振り返りと先輩 Fac や心理士からの助言、「安定期」では参加遺族の変化の確認、「現在」では自分の言動の振り返りと気持ちの共有がなされていた。これより、大きく分けると①支援者自身の言動の振り返り、②気持ちの共有、③参加遺族の変化の共有、④先輩や専門職からの助言という四つの内容に分類される。これらは順に、①具体的な進行技術の向上、②体験と距離を取れることやネガティブな感情の解消、③調子を崩した参加遺族がいれば面談などでフォローができる、④第三者からの助言で視野が広がる、などの有意義な機能があると考えられる。

3) SG へ参加しやすくする工夫

参加遺族が SG へ参加しやすくする具体的工夫は各時期で様々見られたが、大別すると以下

の三つに分けることができる。一つ目は、〈お出かけ SG の実施〉、〈ランチ会の実施〉、〈訪問型 SG の実施〉、〈開催場所の工夫〉などのように時間や場所という構造を柔軟に変更した工夫である。二つ目は〈ゲストスピーカーを呼び知識を得る〉や〈他の遺族の講演を聞いてもらう〉のように SG 以外の資源を活用する工夫である。三つ目は、〈手記集の発行〉や〈参加遺族へお便りを出す〉といった形あるものとして表す工夫である。一つ目と二つ目の工夫で共通しているのは、参加遺族の希望を軸に様々な方法を考案している点である。参加遺族の希望やニーズに沿っている点で意義が大きいと考えられる。被害者支援活動を進めるに際しては、まず被害者の気持ち、視点を大切にすべきという村瀬（2004）の示唆を具現化した工夫であると言えよう。三つ目の工夫は、言語化することによって参加遺族が気持ちを整理し、また参加遺族と支援者が繋がるといった、過去の自分や他者と繋がる工夫であると考えられる。これらの多様な工夫によって、参加遺族にとって SG の魅力や意義が高まっていることが推察される。

3. SG 運営上の留意点

1) 二次被害を防ぐ取り組み

中島ら（2006）によると「事件後、関わる人によって被害者の気持ちを傷つけられるような言動」は二次被害と呼ばれ、「被害者に関わる支援者は、まず二次被害を与えない対応を行うべきであり、そのためには、被害者のおかれた状況や心理を理解していくための教育や研修が不可欠」であり「教育・研修には二次被害の理解と二次被害を与えないような対応についての内容を含むことが不可欠」とされる。全ての時期で《二次被害を防ぐ取り組み》が見られたことから、支援者はどの時期においても二次被害を防ぐ意識を高く持っており、教育や研修が機能していると推察される。さらに下位カテゴリーを詳しく見ると、例えば「立ち上げ期」では、SG 開始前の準備として〈参加遺族についての事前の十分な理解〉、SG 開催中の〈参加遺族に対する言葉の遣い方〉と〈余計なことは言わない〉、SG 終了後の〈SG 直後の参加遺族への声掛け〉や〈振り返り後の参加遺族への声掛け〉と、支援者は SG の前後および最中の三段階で留意していることが分かる。この三段階に渡る丁寧な取り組みが二次被害を防ぐことに繋がっている可能性は高いと推察される。

2) 支援者としての立場に関する留意点

「立ち上げ期」と「展開期」という主に SG のプロセスにおける前半部分で、支援者としての立場に関する留意点が見られた。詳細に見ると、「立ち上げ期」の《支援者としての立場の自覚》では主に立場の自覚、「展開期」の《支援者としての立場の明確化》では主に立場を明確化し伝える、と段階を踏んでいるように考えられる。この立場の自覚と明確化は、対支援者自身と対参加遺族という二つの異なる意義があると考えられる。福島（2011）は、犯罪被害者の支援組織において現実的に要求を受けられないこともあるのは、非常に難しいジレンマであり、支援者が自分の役割に限界を認識することは一つの大切な工夫である、としている。このように支援者自身にとってジレンマを抱えやすくする有効な工夫であると考えられる。また対参加者においては支援者が立場や限界を示すことは枠を示すことであり、その枠は安全弁としても機能しうると考えられる。すなわち、その枠の中においては支援が受けられるという条件付き

の安心感を与えることができると考えられる。

3) 参加遺族の安全感・安心感を確保する

「安定期」と「現在」という主に SG のプロセスにおける後半部分で、参加遺族の安全感・安心感を確保する留意点が見られた。藤崎・西山（2006）が指摘するように、遺族は死別により傷つきやすい状態にあり、支援者の何気ない一言によって心身の状態が悪化する繊細な側面がある。Herman（1992/1996）は外傷体験を持つ人々のグループにおいて「すべての参加者を外傷の再演の危険から適切かつ十分に守る構造がなければならない」としており、これは遺族の SG においても当てはまると考えられる。繊細で安全感・安心感が脅かされている遺族にとって最も優先順位が高いのが安全感・安心感の確保であり、それは日常生活においてのみならず、SG においても変わらないであろう。

4) コロナ禍における工夫

「現在」のコロナ禍における工夫として、〈電話で参加遺族の近況を聞く〉など参加遺族の SG への参加している感覚を絶たせないような工夫が見られた。しかし仮に今後、新型コロナウイルス感染症が終息しても、他の感染症や自然災害などの影響により遺族が一堂に会するのが難しくなる事態は今後もありうる。そのため、吉川（2021）や三國（2021）が示すようにオンラインによるグループなどこれまでになかった手法によるさらなる工夫の検討も必要になると考えられる。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究は少数の限られた SG および支援者を対象としたため、見いだされたモデルを一般化するには限界がある。今後は様々な遺族の SG を運営する支援者に対して調査を行い、本研究のモデルが当てはまるか検討するのが課題である。

付記

本研究は、第 21 回日本トラウマティック・ストレス学会（2022 年 7 月）および日本人間性心理学会第 41 回大会（2022 年 9 月）において発表した。

文献

- 安部恒久（2010）. グループアプローチ入門——心理臨床家のためのグループ促進法. 誠信書房.
- 藤崎 郁・西山佳奈（2006）. 交通事故遺族の受ける二次被害の現状とセルフヘルプ・グループの果たす役割. 日本看護研究学会雑誌, **29**(1), 89-96.
- 福島 円（2011）. 犯罪被害の支援者における疲労と困難. 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 17 号, 15-26.
- Herman, J. L.（1992）. Trauma and recovery. New York: Basic Books. 中井久夫（訳）（1996）. 心的外傷と回復. みすず書房.
- 法務省法務総合研究所（編）（2022）. 令和 3 年度版犯罪白書——詐欺事犯者の実態と処遇. 日経印刷株式会社.

- 岩壁 茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究. 岩崎学術出版社
- 小西聖子・白井明美 (2007). 「悲しみ」の後遺症をケアする——グリーフケア・トラウマケア入門. 角川学芸出版.
- 公益社団法人全国被害者支援ネットワーク (2022). 全国の支援センター「被害者支援センター」一覧. nnvs.org/shien/list/ (2022年10月1日取得)
- 三國牧子 (2021). オンライン・エンカウンターグループの可能性. 人間性心理学研究, **39**(1), 13-19.
- 宮地尚子 (2007). 環状島＝トラウマの地政学. みすず書房.
- 三好真人 (2019). 断酒会会長たちが抱える運営に関する問題の検討. 心理臨床学研究, **37**(5), 421-432.
- 村瀬嘉代子 (2004). 心理臨床と被害者支援. 臨床心理学, **4**(6), 705-709.
- 長井 進 (2004). 犯罪被害者の心理と支援. ナカニシヤ出版.
- 中島聡美・小西聖子・辰野文理・白井明美 (2006). 犯罪被害者などの二次被害及び再被害の予防に関する研究. 社会安全：財団法人社会安全研究財団レポート, 68号, 22-31.
- 中島聡美・白井明美・真木佐知子・石井良子・永岑光恵・辰野文理・小西聖子 (2009). 犯罪被害者遺族の精神健康とその回復に関連する因子の検討. 精神誌, **111**(4), 423-429.
- 長井進 (1999): 第6章 トラウマを和らげるために 諸澤英道 (編) トラウマから回復するために. 講談社. pp82-96.
- 岡本かおり (2011). 民間団体における犯罪被害者支援——回復の手助けと二次被害の防止. 現在のエスプリ, 524.
- 大河内範子・田村節子・高松 里 (2018). 膠原病患者を対象としたサポート・グループの実践——援助効果と運営者の役割についての検討. 心理臨床学研究, **36**(5), 545-555.
- 大崎園生 (2008). セルフヘルプ・グループ研究の現状と犯罪被害者のセルフヘルプ・グループにおける課題——特に専門職とのかかわりに焦点を当てて. 愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要, 11号, 127-145.
- 大山みち子 (2016). 性暴力被害者への中長期的ケア. 小西聖子・上田鼓 (編) 性暴力被害者への支援——臨床実線の現場から. 誠信書房. pp105-146.
- 酒井肇・酒井智恵・池埜聡・倉石哲也 (2004). 犯罪被害者支援とは何か——附属池田小学校の遺族と支援者による共同発信. ミネルヴァ書房.
- 佐々木健太 (2021). 犯罪被害者遺族のサポート・グループの有効性と機能の検証. 日本心理臨床学会第40回大会発表論文集, 49.
- 白井明美 (2008). 遺族のメンタルヘルスと対応. 小西聖子 (編). 犯罪被害者のメンタルヘルス. 誠信書房. pp122-143.
- 白井明美・中島聡美・真木佐知子・辰野文理・小西聖子 (2010). 犯罪被害者遺族における続柄の相違が精神健康に与える影響についての分析. 精神保健研究, **56**, 27-33.
- Spooren, D.J., Henderick, H., & Jannes, C. (2001). Survey description of stress of parents bereaved from

a child killed in a traffic accident. A retrospective study of a victim support group. *OMEGA - Journal of Death and Dying*, **42**(2), 171-185.

高松 里 (2009). サポート・グループとは何か? 高松 里 (編). サポート・グループの実践と展開. 金剛出版, pp15-30.

高松 里 (2021). 改訂増補セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド——始め方・続け方・終わり方. 金剛出版.

富永良喜 (2004). 被害者支援における基本的考え方について. *臨床心理学*, **4**(6), 710-715.

吉川麻衣子 (2021). オンライン高齢者サポート・グループの可能性 ——「沖縄戦を体験した人びとの語らいの場」のプロセスをもとに. *人間性心理学研究*, **39** (1), 3-11.